

41340

教科書文庫

4

810

31-1919

20000
80488

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

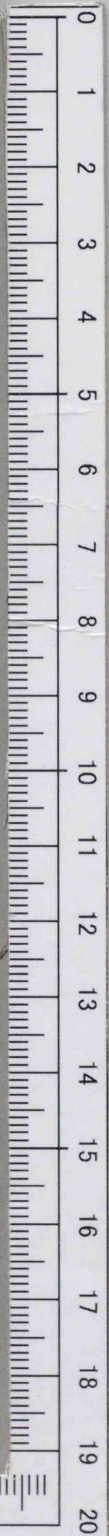


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



8a
810
大8

尋常
小學

國語讀本

卷五

文部省



資料室



尋常
小學

國語讀本

卷五

文部省



32
810
大8

12
17

もくろく

一	大日本	一	十四	雨	五十
二	中村君	二	十五	養老	五十二
三	大蛇たいぢ	七	十六	日本三景	五十六
四	松太郎の日記	十二	十七	虹	六十
五	金鶏勲章	十七	十八	峠から町へ	六十三
六	鯉のぼり	二十	十九	用水池	六十八
七	大賣出し	二十二	二十	八幡太郎	七十九
八	ツバメ	二十五	二十一	水見舞	八十二
九	私のうち	二十七	二十二	郵便函	八十九
十	遠足	三十四	二十三	一足々々	九十五
十一	熊襲征伐	四十一	二十四	ブダウ	九十五
十二	一口話	四十五	二十五	熊のさゝやき	九十七
十三	蠶	四十六	二十六	東京停車場	百

國五

陛下
民七千
萬(万)



一 大日本

一 大日本
大日本、大日本、
神のみすゑの天皇陛下
われら國民七千萬を
わが子のやうに
おぼしめされる。
大日本、大日本、
われら國民七千萬は

一

仕

天皇陛下を神ともあふぎ、
おやともしたひてお仕へ申す。
大日本、大日本、

代

神代此の方一度もてきに
負けたことなく、月日とともに、
國の光がかがやきまさる。

二 中村君

當日

四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいて

先生徒

みると、先生が知らない生徒を一人つれて
お出でになりました。

教室

「ここがあなたの教室です。せきはあれに
します。」

といつて、此の間からあいてゐたせきをお
さしになりました。さうして「山田さんとお
よびになりましたから、はい」と答へますと、
「此の方は中村さんといふ人で、今度遠い

級 君

所から来て、今日から此の級へはいる方
です。

とおつしやいました。又中村君には、

「これは級長の山田さんです。分らないこ

とは此の方におききなさい。」

とおつしやいました。私ども二人はていね
いにおじぎをしました。

中村君は色が黒くて、まるまると太つてゐ

冬

里

ます。氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと、
前からの友だちのやうになりました。

中村君がこれまで居た所は日本の南の方
で、冬でもめつたに雪のふることがなく、う
めやさくらも、こちらよりはずつと早くさ
くさうです。何でも汽車に二日二ばん乗通
して、こちらへ着いたのださうです。から、何
百里かはなれてゐるのでせう。こちらは今

君 生

さくらのさかりですが、あちらではもうと
うにちつてしまつたさうです。

ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村
君が泣いてゐました。聞けば、級のもものが二
三人で、中村君を生いきだといつて、いぢめ
たのださうです。僕は

「君、しつかりしたまへ。日本の男は泣くも
のではない。」

問

といつて、力をつけてやりました。中村君は
學問もよく出来るし、うんどうも上手です。
僕は自分よりえらい友だちを大ぜいして
いぢめるのは、男らしくないと思ひます。

三 大蛇たいぢ

あまてらすおほみかみ
天照大神の弟の方に、すさのをのみことと
申す神様がございました。ある時、いづも出雲の國
のひの川のはたをお通りになりますと、川

流

娘

上から箸はしが流れて來ました。みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、だんだん山おくへおはいりになりますと、おぢいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

「なぜ泣くか。」

とおたづねになりますと、おぢいさんが、



「私どもにはもと娘が八人やまたございました。それを八岐の大蛇をろちが來て、毎年一人づつたべました。もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。」

尾頭

生

酒

「どんな大蛇か。」

「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほほづきのやうに赤く、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」

「よし。其の大蛇をたいぢしてやらう。強い酒をたくさんつくれ。」

とおいひつけになりました。

酒が出来ると、みことはそれを八つのをけ

待

飲

血切

に入れさせて、八岐の大蛇の來るのを待つていらつしやいました。

間もなく大蛇が來て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

飲みほして、大蛇がよひつぶれますと、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。ひの川が血になつて流れました。

尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。これはめづらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

四 松太郎の日記

四月二十一日 土曜 雨

今日から日記をつけることにしました。學校からかへつて見ると、廣田君から急はがきが来てゐました。

北國にも春が來ました。うめやも、やさくらがみんな一しよにさいてゐます。これだけはお目にかけたいと思ひます。

と書いてありました。

晴

四月二十二日 日曜 晴

朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行ききました。かへりみちにはなれ馬がとんで來ましたので、どうしようかと思つてゐますと、よそのをぢさんが大手を廣げてとめて下さいました。

月

四月二十三日 月曜 晴

四月二十四日 火曜 晴

病

ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんばいでしたが、かへつて來ると、もうよくなつてゐて、尾をふつてむかへに出ました。

四月二十五日 水曜 曇

つゞり方の時間に、すゞめが教室の中へとびこみました。先生がまどをすつかり明けて、出しておやりになりました。

曇 水

木 筆 金 海 葉

夕方から雨がふり出しました。

四月二十六日 木曜 雨

学校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。

四月二十七日 金曜 晴

海軍のをぢさんがお出でになつて、春子には急葉書とりボン、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。

五 金鷄勲章

「をぢさん、勲章くんしやうがふえましたね。一番こつちは金鷄勲章しんでせう。」

「あゝ、今度の戦争せんきやうでいたゞいた。」

「金の鳥がついてゐますね。」

「これは鷄とだよ。それで金鷄勲章といふのだが、鷄のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」

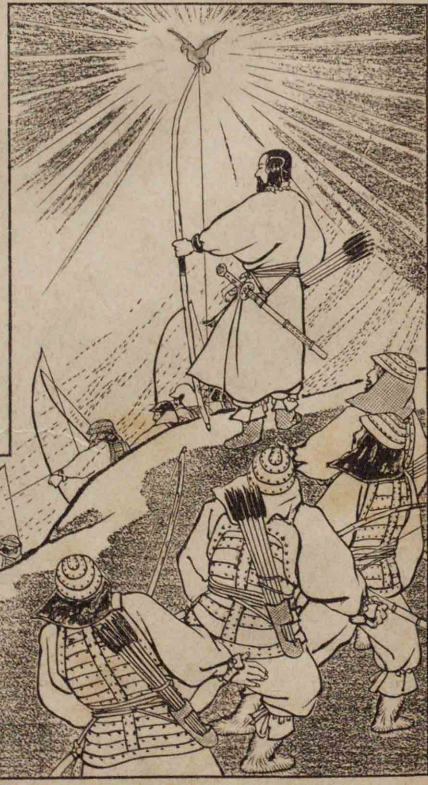


「い、え。話して上げようか。」

「はい。」

「むかし神武^{じんむ}天皇がわるものどもをごせい
 ばつになつた時、わるものどもが強くて、お
 こまりになつたことがある。其の時一天に
 はかにかき曇つて、ひようがひどくふり出
 すと、金色の鶏が一羽とんで来て、天皇のお

弓の先にとま
 つた。鶏の光が
 まるでいなび
 かりのやうで、
 わるものどもは目を明けてゐ
 ることが出来ず、おそれてみん
 なにげてしまつたさうだ。其の
 いはれで、戦争の時、大きな手が



らを立てた軍人に下さる勲章に、金の鶏を
おつけになつたのだ。

此の勲章には功一級こうから功七級まである。

「をぢさんのは。」

「をぢさんのは功七級だ。」

六 鯉のぼり

ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持
よくてつてゐます。さをの先の矢車ががら

鯉

がらと鳴る

と、鯉が大きい

な口で、思ふ

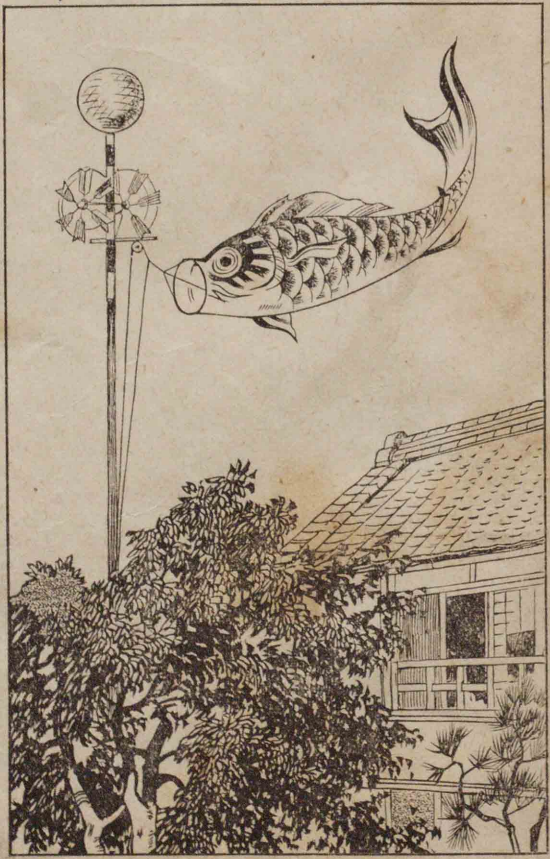
ぞんぶん風

をのんで、家

のむねよりも高く尾を上げます。其の尾を

下して来て、さをに着けるかと思ふと、又は

らをふくらませて、をどり上ります。其のた



地

びに、鯉のかけが地の上をおよぎます。

七 大賣出し

廣告

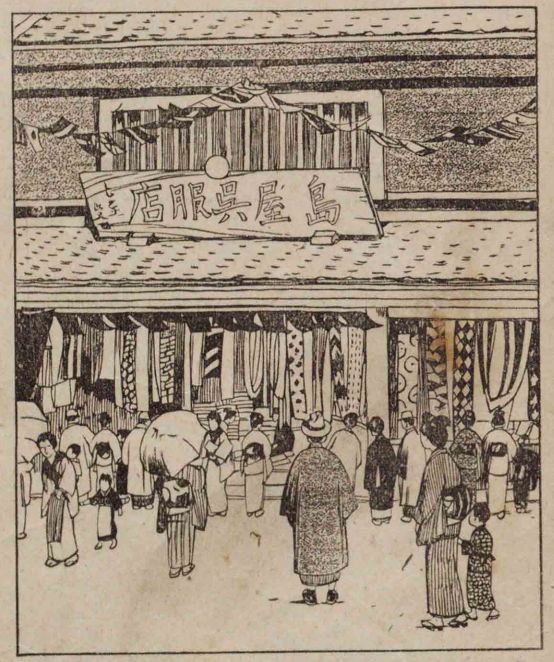
美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しはいよいよ今日からはじまりました。

おひるすぎおかあさんにつれられて、買物に行きました。島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。二かいのまどに

萬

聞

帶



萬國旗きがつるしてあつて、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。

下のかざりまどには、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帶や、すゞしさうな浴衣ゆかた地がかざつてあります。入口の左手には、小

下

切やえりや帯あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

頭

注文

店の中へはいつて見ますと、番頭さんたちは、お客から注文をうけては、小ぞうさんたちにしづをしてゐます。小ぞうさんたちは、土さうからいろくゝな反物や帯地をかついて来て、お客の前につみ上げます。しば

反

景

らく待つて、私どもは浴衣地とこんがすりを買つて外へ出ました。うちへかへつて、ふろしきを明けて見ましたら、店のしるしをついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐました。

ハ ツバメ

ツバメハトブコトが上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、物ニツキアタルカト思

フト、カルクミヲカハシテ、矢
ヨリモ早クトシテ行キマス。
ガントオナジク、ワタリ鳥デ、
アタ、カニナツテ、ガンガ北
ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カ
ラワタツテ來マス。サウシテ
ダンく、スゞシクナツテ、ガ
ンガソロく、ワタツテ來ル



作物

外

コロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。ツバメハ
コチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒ
ナヲソダテマス。

ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク虫ヲ取ツテ
タベマスカラ、人ノヤクニ立ツ鳥デス。

九 私のうち

一

こんな所と思ふやうな村外れに、家が一

庭

栗

けん立つてゐます。これが私のうちです。それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが庭さきのもみぢの木は、前の川に美しいかげをうつしてゐます。

うら一めんの林は私のうちのもので、此のころは栗の花がたくさんさいてゐます。此の間町のをばさんがいらつしやつてこ

んなしづかな所でくらししてみたい。」とおつしやいました。

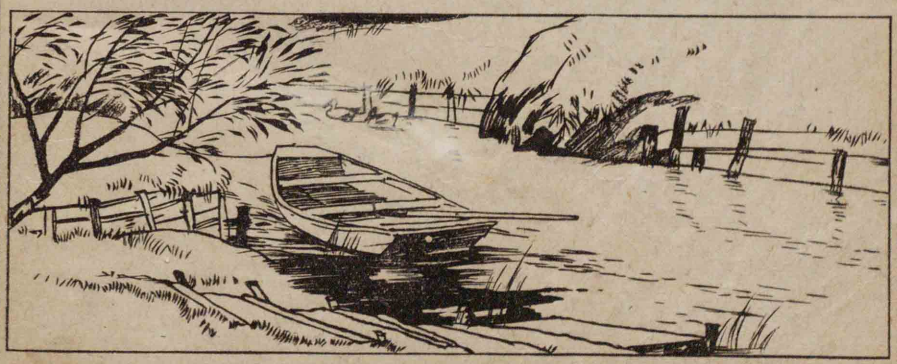
二

もえる木のめに春風吹けば、
うちのまはりのうめももさくら、
かはるぐに花さきみだれ、
人も来て見る、小鳥もうたふ。
うちの前には小川が流れ、

ぐ

夏
時雨

舟もるかべば、あひる
もうかぶ。
つりも出来るし、およ
ぎも出来て、
あつい夏でもすずし
くくらす。
つゆや時雨が色よく
そめた



秋

うらの小山に秋風吹けば、
木々のしづくもきのことなつて、
はんのごはんのおかずにまじる。
松をのこして木の葉がちれば、
庭は一日日がよくあたる。



本のおさらひすました後は
枝につるしたぶらんこ遊。

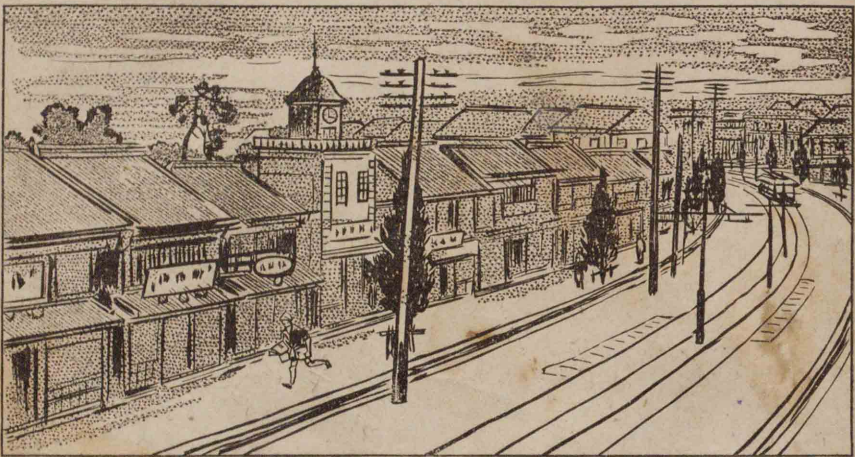
三

表
歩道

私のうちの表通は電車や自轉車が引切なしに通つて、りやうがはの歩道に人通のたえることがありません。
ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになつた時、お見送をして表へ出て見ました。

晝
聞

數



晝あれほどにぎやかな通に、新聞配達と四五人の人のすがたが見えるだけでした。此の時何の氣もなく自分のうちを見て、その小さいのにおどろきました。店客間・居間・勝手など、これで間數が七つもあるとは、

時計

どうしても思はれませんでした。せまい中庭から屋根の上に頭を出してゐるひよろ松は、葉がほこりだらけでした。私のうちの右どなりは小間物屋で、左どなりは時計屋です。時計屋の前に電車の停留場があります。

十 遠足

「おかあさん、お天気は。」

起

遠足

分

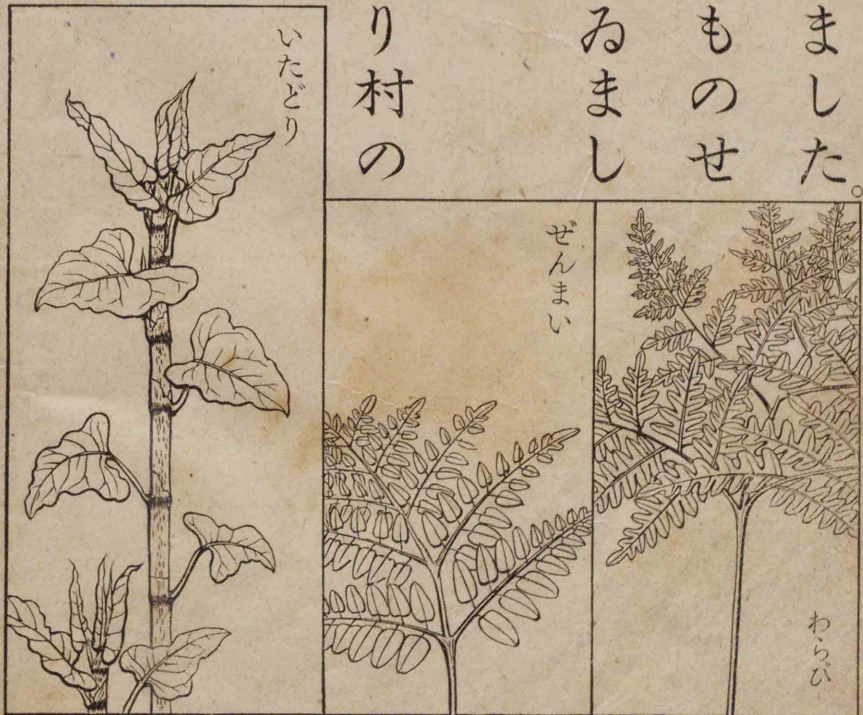
平門

と、とこの中からおき、すると、
「よいお天気です。早く起きてお出でとおつしやつたので、はね起きました。遠足のしたくをして学校へ行くと、もう級のものが大分来てゐて、先生もお出でになつてゐました。」

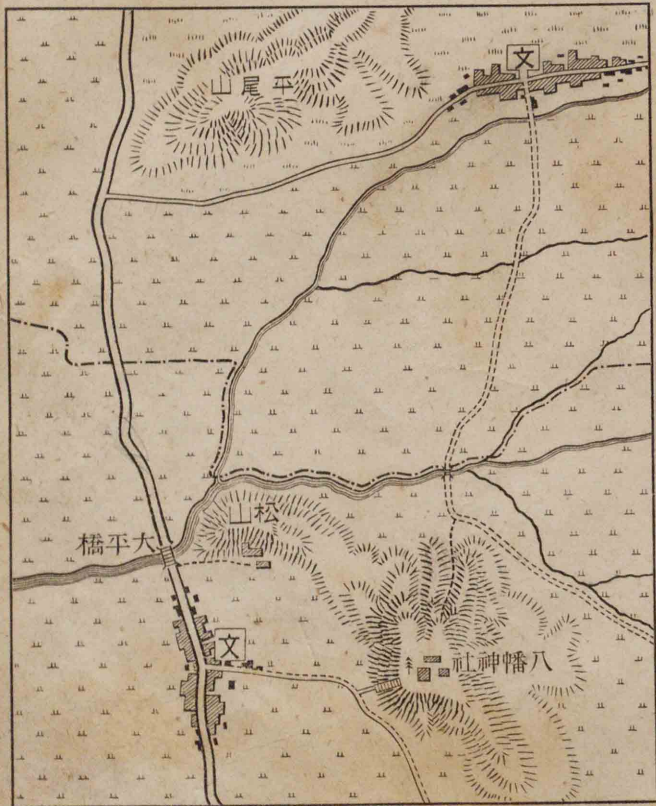
学校の門を出て西へ向ひました。平尾山のすそへ行くと、わらびやぜんまいがすつか

匹

り葉になつてゐました。
 いたどりは私どものせ
 いほどにのびてゐまし
 た。
 大道へ出て、となり村の
 入口へ行くと、道
 ばたの立石にさ
 るが三匹ほつて



渡橋



0 5 10 丁 界村 地草 田 校學文

ありました。一匹は目に、一匹は口に、一匹は
 耳に手をあててゐます。見ざるいはざる聞

かざるとい
 ふのださう
 です。
 大平橋を渡
 つてから左
 へをれて、松

瓦

山の下へ瓦やきを見に行きました。ちやうどかまを明けたところで、白いけむりが立つてゐました。

此所

此所を出て、となり村の學校の前へ行くと、先生が「ちよつと用があるから」といつて、私どもを道に待たせておいて、學校へおよりになりました。此の時私どもの村へよく物賣に来るおぢいさんが、紺のふろしきづつ

用

紺

みをしよつて来て、

「皆さん、遠足かね。」

といつて通りました。

八幡様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。私どもが六人で、やつとかへました。さしわたしが八尺もある。と先生がおつしやいました。

御 神 尺

先づ拜禮はいれいをして、拜殿でんのよこの芝しばの上で、べんたうをたべてゐると、さつきの學校の小使づかひさんが麥ゆを持つて來て下さいました。のどがかわいてゐたので、みんな大よろこびで飲みました。

先生が拜殿にかけてある繪馬ゑまのお話をし、て下さいましてから、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

十一 熊襲征伐

昔者

御

昔熊襲くまそのかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。天皇は日本武尊やまとたけるのみことにこれを征伐せいぼつせよとおほせられました。

尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいました。たが、いさみ立つてお出かけになりました。

祝造

呼

お着きになりますと、間もなくたけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。尊はかみをといて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。大ぜいの女どもにまじつていらつしやいますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。

夜がふけて、人々はかへりました。たけるも酒によつてねむりました。此の時尊はふところのつるぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。なみくの者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、たけるも熊



襲のかしらだけあつて、

「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」

「はい。尊は手をおゆるめになりました。」

「あなたはどなたでいらつしやいます。」

「われは天皇の皇子みこやまとをぐな。」

「あゝ、たゞ人ではおありなさらなかつた。」

居

息

自分にまさる者はないので、たけると申して居りましたが、みやこには強いお方がおありになつた。今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。」
「といつて、息がたえました。これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることにになりました。」

十二 一口話

「日本一の事をくふうした。」

「何だ。」

「米をつくの^に、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。上のうすには、どうして米を入れる。」
「それまではまだかんがへなかつた。」

十三 蠶

蠶

昨日からうちの蠶が上りはじめました。上

頃 桑 棚

る頃には、蠶のからだ^ががすき通るやうになります。もう桑の葉をたべないで、頭を上げて繭^{まゆ}をかける所^{ところ}をさがします。それをひろつて、まぶしへうつすのですが、少しでもおくれると、かごのうらや棚^{たね}のすみなどで繭^{まゆ}をかけはじめますから、ちつともゆだんが出来ません。今日のお晝頃^{ひるまじり}はうち中目^{なかつめ}がまはるほどいそがしうございました。



まぶしには、かさく〜といふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。早いのはもう繭を作り上げてゐます。又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、一生けんめい

にはたらいてゐるのもあります。まだ繭をかける場所をさがしてゐるのもあります。今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。さつきおかあさんが、民子、いよく今夜一ばんになつたよ。あれで八分通だ。と、ねえさんにおつしやいました。おかあさ

んもねえさんも、此の五六日は夜もろくろくおやすみにならないのです。

十四 雨

此ノ頃ハ雨ガ降りツバイテ表^{オモテ}テ遊ブ日ガアリマセン。カウ毎日降ル雨ハドウナツテシマフノデセウ。

カラカサニ降ル雨ガ四方へ流レオチルヤウニ、水ハ低^{ヒラ}イ方へ低イ方へト流レテ行キ

低

降

糸系

支流 雨

マス。庭へ降ル雨モ、庭ノ高イ所カラ、低イ方へ流レテ行キマス。ハジメハ糸^{イト}スチホドノ流デスガ、ソレガダンクアツマツテ、ミゾニオチル頃ニハ、流モ早クナリ、水ノカサモ多クナリマス。

雨水ノ流レル道ハ地^チ圖^ヅニカイタ川ヲ見ルヤウデス。本流ガアリマス。支流ガアリマス。低^{ヒラ}クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、

其所

高イ所ニ行キアタルト、其所ヲヨケテ流レ
マス。カウシテ流レル水ハ、ミゾカラ小川へ、
小川カラ大河へ、流レ〜テ海へ行キマス。
雨水ハタゞカウシテ流レルバカリデハア
リマセン。地ノ中ニシミコンデ、井戸水ヤ泉イシミ
ノモトニナルノモアリ、目ニ見エナイ水蒸シヨウ
氣ニナツテ、空へカヘルノモアルサウデス。

十五 養老

薪

月

腰

喜

或

昔美濃ミの國にまづしい人がありました。山
から薪を取つて来て、それを賣つて、くらし
を立ててゐました。此の人に年取つたおと
うさんがありました。酒がすきでございま
した。それで山へ行くにも、へうたんを腰に
着けてゐて、かへりに酒を買つて来ては、お
とうさんを喜ばせてゐました。
或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつ

むけにたふれました。すると酒のにほひが
しますので、ふしぎに思つて、見まはします
と、石の中から酒にいた物がわいてゐます。
なめてみると、酒のあぢがいたします喜ん



で、それから
は毎日其の
酒をくんで
来て、おとうさん

都

親孝行

改

に上げました。

いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、
わざく、奈良の都ミヤコから美濃の國ミナモトへ行幸ぎやうかうに
なりました。酒の出る所を御らんゴランになつて、

これは親孝行オヤコウコウのほうびに、神々がさづけ
られたにちがひない。

とおほせになりました。又まことにめでた
い事だといふので、年がうやうらうを養老とお改め

になつたと申します。

十六 日本三景

景色
天

日本の國には、景色のよい所がたくさんあります。松島、天の橋立、宮島の三つを昔から日本三景と申します。

小

松島は大小二三百の島が海上三四里の間にちらばつてゐて、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。あたりの高い

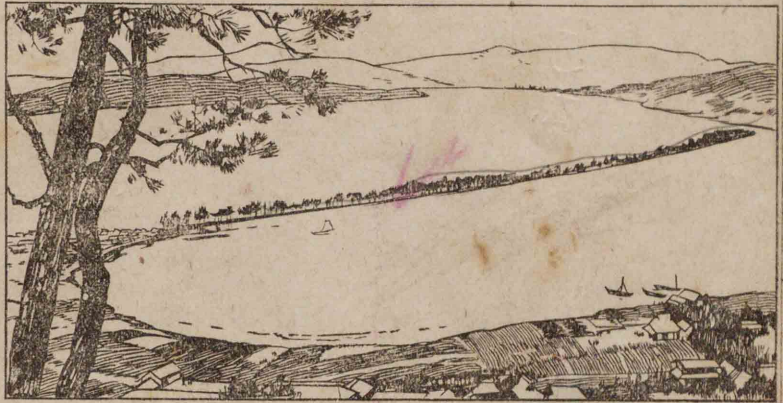
細
間
砂

所からもながめますが、多くは舟に乗つて、島の間を通つて見物します。晴れた日月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里は、は四五十間。其の洲の白い砂



面 神社 朱殿後



の上アサに、青い松が一面アサに立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

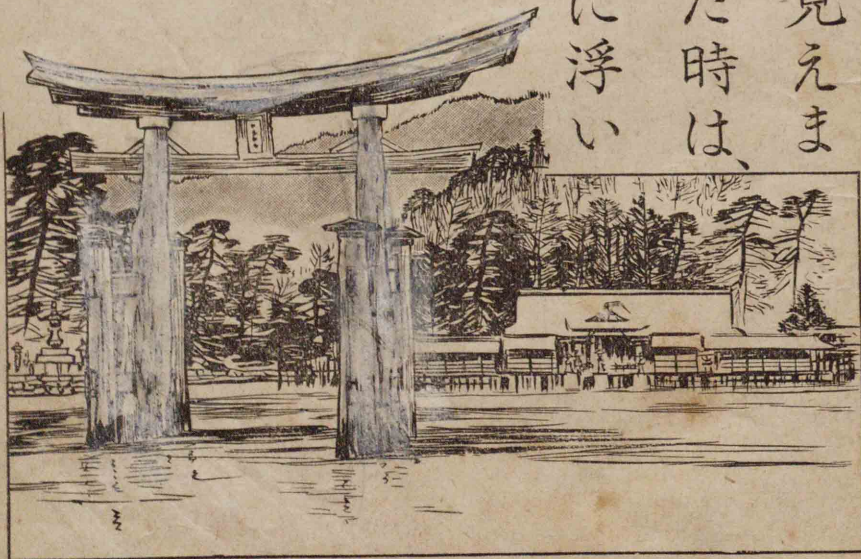
宮島はまはりが七里もある島で、島の山には鹿しかがたくさんすんでゐます。

島の東北いつくしまに嚴島神社があり

ます。朱ぬりの社殿が山のみどりを後にし

前 浮

て、たいそうきれいに見えます。ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊くわいろうが海の中に浮いて、お話にある龍宮りゅうぐうはこれかと思はれます。社前の海に、日本一の大鳥居があります。



十七 虹

あれく、虹が立つてゐる。
森も小山も下に見て、
向ふの田から大空の
雲までとゞく弓のなり。
だれがかけたか、虹の橋。

さてく、虹は美しい。

赤黄みどりやむらさきと、
七つの色をならばせて、
空の急ぎぬへ一筆に、
だれがかいたか、虹の橋。

さてく、虹はおもしろい。
雨のはれ間にちよつと出て、
用ありさうに天と地の

遠きをつなぐ雲の上。
だれが渡るか、虹の橋。

あれく、虹がきえて行く。

あのあざやかな色どりも

しだいく、にうすくなり、

小山の方はもう見えぬ。

だれがけすのか、虹の橋。

十八 峠から町へ

峠

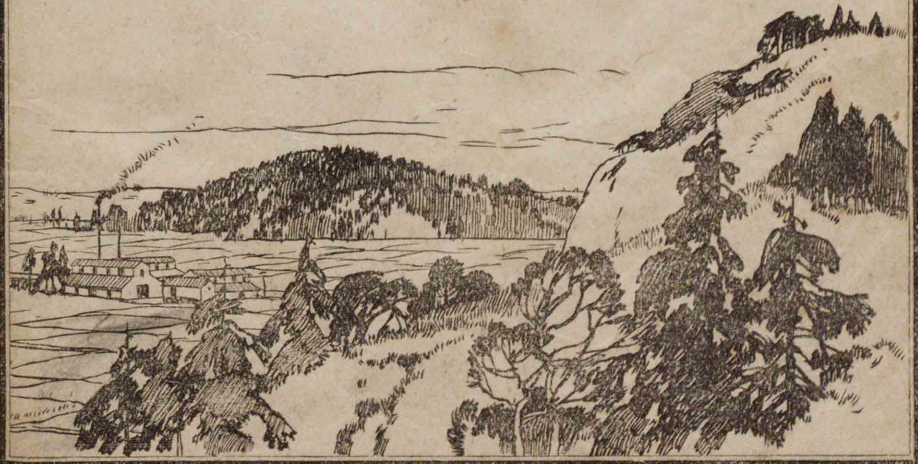
作太郎は父につれられて、はじめて町へ行
きました。村ざかひの峠へ上りますと、もう
町が目の下に見えます。

半

「おとうさん、町があんなに近く見えてる
て、まだ一里半もあるのですか。」
「さう。これで中々近くはない。あのたんぼ
の中に、ちよつとした森があるだらう。あ

十八峠から町へ

れは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。あの青田の中にあるのだらう。あれは製絲工場



で、女工が四百人も絲を取つてゐる。うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。あ、町の方へ馬車がいかにして行きます。今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで来てもよい。



十八峠から町へ

下 兩 言

二人は峠を下りて、となり村へはいりまし
た。道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田
の草取のさい中です。

「うちの方では、田に水がないと言つて、さ
わいでゐますのに、此の村にはよく水が
ありますね。」

「よく氣がついた。此の村には、向ふの杉山
のすそに、大きな用水池があつて、其所か

掘

ら水を引くからだ。」

「私どもの村では、どうして池を掘らない
のでせう。」

「來年あたりから掘ることになつてゐる。
少しまはり道だが、となり村の用水池を
見て行くことにしよう。」

「用水池には大きな鯉が居ませうね。」

「鯉も居るが、それよりも、もつとお前に聞

置

かせて置きたい話がある。

十九 用水池

貧乏

昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふとあゝ、あの貧乏村か。と言はれたものださうだ。此のあたりの青田も、其の頃は大きいあれ地で、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

地

ところが、今から百二三十年前に、此の村の

考 田

相談



庄屋が、村のことをいろく^{しやうや}と考へたすゑ、どうかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。田地にするには、水がいるが、引いて来る川がない。どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。

此の事を村の相談にかけた。村の人々は中大きな仕事だとは思つたが、さうでもし

夫 賛成 着手 代

なければ、外カに村のさかえる工夫クワフはあるま
いといふので、みんな賛成サンセイしたといふこと
だ。
着手セウシウは來年ライネンからといふことになつて、庄屋
は方々カタカタの村へ用水池を見に出た。物なれた
人には相談サダンをかけた。
いよく、其の年になつて、庄屋シヤウヤは普請フシん方を
よそからつれて來た。村の人は代り合つて、

運 幅

一日イツニチ置オキに普請フシんの手つだひをすることにな
つた。土を掘る、石を運ぶ、樋ヒをうめる、土手ドテを
つく、いろくイロクの工事コウジに、村の人は普請フシん方の
さしづをうけてはたらいた。
土手ドテは長さが三百間、高さが六間半、幅は一
番上で三間といふ大きなもくろみであつ
た。

「そんな大きな池があるだらうか。」

首

と言つて、首をひねる者もあつたといふが、
一年ばかりの間は、べつだんくじやうも出
なかつた。氣早な者は自分の持地を田に造
りかへたといふことだ。

翌

翌年の春大雨がふりつゞいて、せつかくつ
き上げた土手が、半分ほどもくづれてしま
つた。すると、

悪

「もくろみが悪い。」

「工夫がたりない。」

「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はい
よいよ貧乏になる。」

などと言ふ者が出て来て、手つだひに出る
者は日ましにへつた。

運

庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、
土手をつきなほしたが、運の悪い時には悪
いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれ

夫 賃錢 身代 藏

て、池のたまり水が村の中へおし出した。かうなつては、もう庄屋の悪口を言ふ者ばかりで、普請方はとうくにげてしまつた。それでも庄屋はくじけなかつた。方々から人夫をやとつて来て、もう一度土手をつきなほした。其の賃錢をみんな庄屋が自分のふところから出した。よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏も

妻 心 毎 急 植

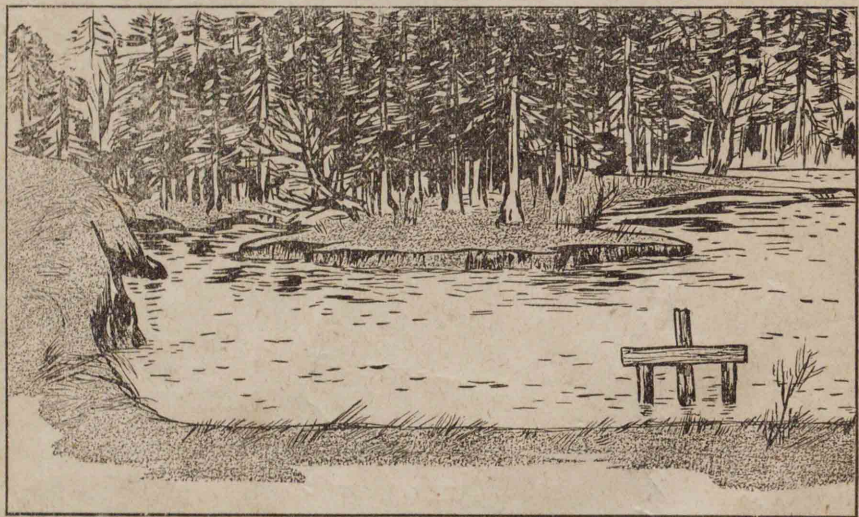
みんな賣りはらつた。しまひには妻や子どもを着がへまでもないやうになつた。人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまくいつた。一雨毎に池の水はふえた。それを見て、村の人は急にあれ地を田にしだした。一冬こして、春には池の水が一ぱいになつた。六月の田植時から七月八月にかけて、水はありあまつた。そ

苦勞

こで一年ましに田がふえたが、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬死んでしまつた。長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。

夫

家屋敷もなく
なつた上に夫
に死なれたの
で、庄屋の妻は



子どもをつれて里へ歸つてゐた。其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子どもにもとの家へ歸つてもらつた。あの白壁造の土藏のある家がそれだ。親のほねをりが子の

時キになつてあらはれたのであらう、あの家にはよい事ヨイコトがつゞいて、身代シニダは前まへよりもよくなつた。

土手ドテの此ココの記念碑キネンビに、今話イマワタシした事コトがくはしく書カいてある。此ココの山ヤマの杉サキも庄屋サヤが先に立タつて植ウゑたのださうだ。

昔ムギの貧乏ヒンボウ村ムラは、今郡イマガンの中でもゆびをりの金持カネモチ村ムラだと言イはれてゐる。今年コトシのひでりにも、

念 郡

此ココの用水池ヨウスイチにはあんなに水ミヅがたまつてゐる。

二十 八幡太郎

八幡まん太郎たろう義家よしが或ある日ヒ安倍宗任あべのみねたふをつれて廣ひろい野原ののを通とほりますと狐きつねが一匹ひとひきとんで出でました。義家よしはせ中のううつぼから、かりまたをぬいて狐きつねを追おつかけました。いころすのもかはいさうだと思おもつて、兩耳りょうみみの間まをねらつ

て、頭の上をすれくにいました。矢は狐の鼻はなのさきの地面ぢめんにつつ立つて、狐はころりとたふれました。かけよつて見て、宗任むねとゆが矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。と言ふと義家がびつくりしてたふれたのだ。ほつて置け、

今いまに生きかへる。と言ひました。さて宗任むねとゆがかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家はせ中をくるりとむけて、うつぼへさ、せました。かりましたは、矢じりがつ



ばめの尾のやうにわれた、たいそうすると
 い矢で、宗任はつい此の間義家にかうさん
 したてきの大將なのです。
 「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があ
 つたら。」
 と、義家の家来どもはひやくくしたといひ
 ます。

二十一

水見舞

叔母

舞

返

おとうさんにうかゞひますと、叔
 母さんの町に大水が出たさうで
 す。皆様におけがもございません
 でしたか、お見舞を申し上げます。

九月七日

竹子

叔母上様

返事

お手紙をありがたう。おとうさん

へ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した事もありませんでしたが、中々のさわぎでした。九月にはいつては雨つゞきでしたが、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき

物まですつかり二階へ上げました。夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がごうくと聞えて来て、間もなく火の見で半しよりをうち出しました。其の時表で水だくとさけぶこゑがしましたので、二階のまどからの

洗
叔父

ぞいて見ますと、水が表の通をさ
つと洗ひました。叔父さんは大へ
んだ土手が切れたといつて、すぐ
屋根へ出ました。たちまち水が二
尺になり、三尺になり、五尺にもな
りました。うら手で助けてくれ助
けてくれと呼ぶこゑが聞えまし
たが、うちでも下の雨戸がたふれ

助

正男

て、中からうすやたらひがぼかぼ
か流れ出すほどで、どうすること
も出来ませんでした。
其のうち、どうやら水が二階に
もつきさうになつたので、わたし
は正男をつれて物ほしへ出まし
た。仕合はせに水はそれからふえ
ませんでした。が、町は大てい水に

つかつて、人家も七八軒流れまし
 た。うちでも一時は飲水やたべ物
 にこまりましたが、今ではあとか
 たづけも大がいすみしました。どう
 か御安心下さい。
 おとうさんやおかあさんには、取
 りまぎれてまだ手紙も上げずに
 居ります。どうぞよろしく申して

下さい。

九月十五日

叔母から

竹子様

二十二 郵便函

郵便 封書

私は町の辻に立つてゐる郵便函でありま
 す。雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝で
 も、此所に立通しに立つてゐますが、葉書や
 封書などを入れる人の外は、私のからだに

承知 切 枚

さほる者キがありません。時々道を人にきいて来た者キと見えて、うん、郵便函といつたのはこれだな。とひとりごとを言つて行く者キがあります。

私のやくめは、御承知ゴウヤクの通り、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切イサシクにあづかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。いかな日でも葉書ハカキの百枚マンや封書

國五 國五

通

種 商 品

の三十通ぐらゐるは、私の口にはいらぬこととはありません。毎日かならず新聞を入れに來る方も四五人はあります。たまには雜ザツ誌シや寫真シヤシンがはいることもあります。作物サカモノの種タネや商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたこととはありません。私の口にはいる物は、はがきの外ナカはきつと

品 價 刻 途

切手キテがはつてあります。それも品と目方に
 よつて切手の價バがちがひます。
 郵便物ユウビンモノをあつめる人は、毎日きまつた時刻
 に來て、私のおなかを明けて持つて行きま
 す。其のあつめに來る頃に、急イシぎの封書フウシヨを入
 れに來る者が、途中チウチュウで人と立話でもはじめ
 ると、私は氣がもめてたまりません。もし間マ
 に合アはないと、向ふへ大そうおくれオクレて着く

悲 苦

からです。
 葉書カキには、大ていちよつとした用事ヨウジが書い
 てありますが、封書には、いろくこみ入つ
 た事が書いてあります。おめでたい事やた
 のしさうな事が書いてありますと、私もう
 れしいと思ひますが、悲カナしい事コトや苦クしさう
 な事コトが書いてありますと、もらひ泣きをい
 たします。いつか大そう雨のふるばんに、年

取つたおぢいさんが、遠方に居るむすこの
 所へ出した封書や、かついで足をはらして
 るる書生さんが、お友だちへ出した葉書に
 は、私もはらわたがちぎれるやうに思ひま
 した。それにはどんな事が書いてあつたか。
 といふおたづねが出るかも知れませんが、
 それは人にもらしてはならないことにな
 つてゐます。

進

銀針

二十三 一足々々

一足々々、遠い所へ進み行き、

一くはく、廣いたんぼをうちかへす。

一針々々、金糸銀糸でぬひをぬひ、

一こてく、大きな土藏の壁をぬる。

ちりがつもつて山となり、
しづくがよつて海となる。

二十四 ブダウ

實

庭サキノブドウ棚ニ、イハク今日日ガサシテヱマ
 ス。フサクト下ツタウスムラサキノ實ハ、
 美シイ玉ノヤウニ見エマス。モウアマクナ
 ツテヱマセウ。
 叔父サンノウチニモ、ブドウ棚ガゴザイマ
 ス。ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガ
 ナツテヱマス。ウチノブドウトハ種ガチガ
 フノダサウデス。

國五

種類

酒

ブドウニハ、マダイロクノ種類ガアルト
 イヒマス。私ドモハブドウノ實ヲ生デタベ
 マスガ、タクサン作ル所デハ、ブドウ酒ヲ造
 ツタリ、ホシブドウニシタリスルト申シマ
 ス。

二十五 熊のさ、やき

二人の者が山の中を通ると、熊くまが出て來ま
 した。一人は早く見つけて、木の上へにげ上

りました。一人はもうにげる間がないので、地にたふれて、死んだふりをしてゐました。熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

熊が来て、からだ中かぎまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

此の時、木に上つてゐた者が下りて来て、

「どんなにこはかつたらう。僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。」
「うん。あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつ

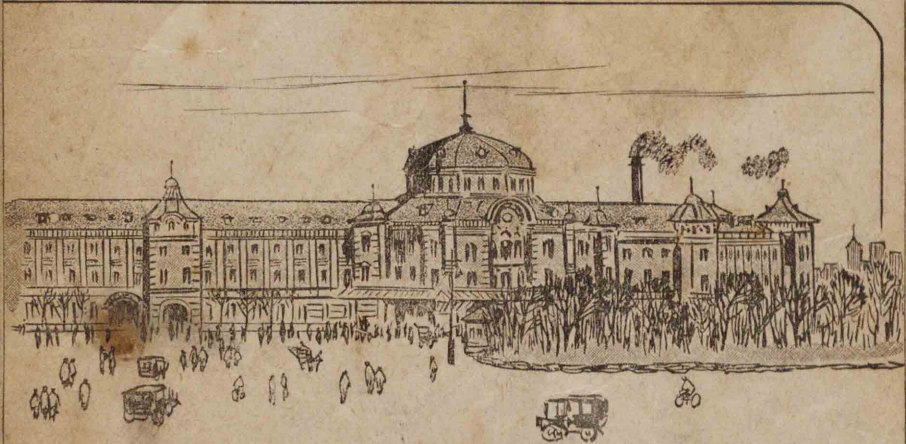


洗 賣替 局央 左 右 役



用になつてゐます。
 停車場の階上には、役所も
 ホテルもあります。階下の
 入口には、左右に大きな待
 合室があつて、此の外に中
 央郵便局の分室もあれば、
 兩替店や、いろいろの賣店
 もあります。又洗面所もあ

帝 第洋停



きあふな』と言つた。
 二十六 東京停車場
 東京停車場は東洋第一の
 大停車場で、宮城の東にあ
 ります。赤れんぐわの三階
 造で、間口が百八十四間も
 あります。向つて右が入口、
 左が出口で、まん中が帝室

力動 發降

れば、食堂（しゆくだう）もありませす。
 此の停車場から、毎日七八千人づつの人
 乗降（のりか）りします。汽車の發着時刻が近（ちか）づく
 自動車馬車人力車がいくだいとなく、入口
 出口（でぐち）によつて來ませす。
 はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降
 りる人は、大てい先づ第一に宮城（みやぎ）をさして
 まるります。
 をはり

國五

大正八年七月廿九日 印刷
 大正八年八月二日 發行
 大正八年八月廿二日 翻刻印刷
 大正八年十二月廿八日 翻刻發行

著作權所有

著作兼 發行者

文 部 省

尋常小學國語讀本卷五

定價 金拾
本年四年度 臨時定價

森本印刷

翻刻發行 兼印刷者

大阪書籍株式會社
 代表者 三木佐助

大正八年八月廿八日
 文部省檢査濟

印刷所

大阪書籍株式會社

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
 株式會社 國定教科書共同販賣所

大阪市南區難波荻原町千百八十八番地九々



一
身
三
本
子
錄
目